

「直腸肛門の外科」

名古屋大学教授 高 木 弘 編集

栃木県立がんセンター所長

小 山 靖 夫

書名は「直腸肛門の外科」であるが、I. 手術と pitfall (問題点)、II. 直腸癌に対する補助・合併療法、III. 直腸癌術後管理と follow-up、の三部構成になっており、本書の狙いは直腸癌にあることがわかる。

解剖、検査、診断に始まり、各種術式の選択基準、術式解説から術後管理、ストマケア、更には長期 follow-up の実際と再発癌の対策に至るまで、直腸癌のすべてが、極めて要領よくまとめられている。殊に手術術式については、オーソドックスな手術はもちろん、局所切除術や神経温存手術のような機能愛護的術式から、仙骨合併切除を伴う骨盤内臓全摘術のような超拡大手術に至る今日の話題の領域まで、幅広く編集されている。のみならず、分担執筆者

は、各領域のパイオニア、豊かな経験を蓄えられたベテラン、あるいは新進の専門家であって、それぞれの art の凝集をここに見ることができるのは素晴らしいことである。本書を繙くとき、経験を積んだ外科医は、執筆者の個性を汲み取りながら、自然と自己の手術観や手技を点検、整理することになるであろう。一方、初心者は本書によって、術前評価、手術術式の決定、術前準備に至る流れを大局的に理解することができる一方、本書の記載に従って、現実の症例を点検すれば、要所要所がピタリと押さえられるので手順良く、抜けのない手術準備を進めることができるだろう。また、手術の前日には本書をもう一度開いて、明快な記述や挿図から、手術の重要な場

面のイメージを、症例に則して頭の中に描いてみることをお勧めしたい。明日の手術が、より理解しやすく印象深いものになること受け合いである。

日頃、オーソドックスな手術書、手術法に関するオリジナルの文献などに親しむことは、外科医を志す者には大切な心掛けだが、このようにコンパクトで、かつ今日的な内容が盛り込まれた書物は、知識を整理し、確認することに役立つところが大きい。そういう意味では、一般外科を担当してはいるが、この領域を特に専門としていない外科医が身近に本書を置いて、折りに触れ活用されるときに、本書の特徴が最大限に生かされるのではないと思われる。目前の手術に備えての伴侶としては申し分がない書物の 1 つである。

直腸癌のことばかりではなく、三大肛門疾患、すなわち痔核、痔瘻、裂肛についても、簡潔だが大変わかりやすい記述がある。ただ、痔瘻の手術に限って、図解がないのを大変残念に思うのは私だけだろうか。

B5 判 246 頁 図 101 写真 50
原色図 9 1989 送料 300 円
定価 15,450 円(税込)

医学書院 刊